

臨床的な相互作用の生起と活用をめぐって

— 非言語的交流とエナクトメントを中心として —

佐藤 映

1. はじめに

人間同士が共に居る状況においては、常にその複数人の間で相互作用が起こっている。個人に焦点化して考えてみると、人は一つのまとまりを持った総体としてのパーソナリティを持ち、その言動によって他者に多様な影響を与えるし、また与えられる存在である。特に現代においては、直接出会う対面のコミュニケーションのみならず、電話やインターネットを介した、いわば電子機器を媒介としたコミュニケーションも日常的となっている。今や人は身体を運んで面と向かって出会うことなしに、他者と対話することが常に可能なのである。

そのような中で、心理療法、特に対話型精神療法におけるコミュニケーションは、面接室で実際に他者と対面することに重きを置く。心の変容のためには、人間同士が面と向かって対話する状況における様々な相互作用が重要と考えるからである。言語内容だけでなく、語気や身振り手振り、姿勢、表情、時間や料金のやりとり等すべての所作が治療的に活用できる潜在力を持っており、これらは特に身体性を持った個人同士が対面することで初めて実現するのである。心の治療、特に情動の動きや非言語的なやり取りを考慮するものは、直接的な対話の次元で行われることが望ましいと考えられるのである。

本稿では、そのような心理臨床における二者間の相互作用に焦点を当て、様々な相互作用が起こる中で、治療的に意味のある相互作用はいかに生起するのかについて、また、そのような相互作用が生じたとき、治療者はいかに振る舞い、対応すべきなのかについて、諸理論をもとに考察することが目的である。

2. 心理臨床における相互作用

現代の心理臨床の起源と言える精神分析を創始した Freud, S. は、患者の分析を半ば一方向的に行おうとしたため、治療者の個人的な要因による影響を排除しようと努めた。その代表的なものが逆転移であろう。逆転移の影響が治療に持ち込まれることによって、治療者は患者の心の動きを純粋に映し出すスクリーンの役割を全うできなくなると考えたのである。さらに、精神分析において相互作用といえる事柄は、患者の連想に対する治療者の解釈である。特に転移解釈によって患者に関わり、患者の洞察を促し、抑圧されたものを意識化することが目的とされた。このように古典的な心理療法では、治療者が患者の精神を分析するという一方向的な影

響関係が前提とされていた。

心理療法において、治療者から患者への一方的な影響だけでなく、相互の影響関係について考えられ始めた最初のきっかけは、Winnicott,D.W.による論考である(Winnicott, 1971/1979)。彼は母親-乳児関係において乳児が体験する世界について、対象関係論を理論的な基盤に置いて理解を深め、母親が乳児の環境として存在していることを見出し、心理療法において治療者はクライアントの環境としての母親の役割を担うことを述べ、母子関係という二者の関係性を中心とする発達理論を展開した。このことが、治療者とクライアントの相互交流を重視する理論を開いたのである。さらに、対象関係論の流れに位置付けられる Ogden (1994/1996) は、Winnicott の理論を発展的に継承し、精神分析における間主体性についての考えを深めていった。そこでは治療関係において、治療者とクライアントの交流から出現する第三の主体を定位し、その間主体の持つ創造的な意義を明らかにした。どちらの分析家も、心理療法を考える鍵として、二者の関係性やその間に生じる現象に注目したといえる。

20 世紀後半になって、治療者に生じる患者への感情(広義の逆転移)や二者の関係を考慮しながら進める精神分析の新しい流れの中で、その二者による分析状況を間主観的なものと捉え、治療に生かそうとする分析家がアメリカを中心に現われ始めた。「精神分析は、2つの主観性-患者のそれと治療者のそれ-の交差が構成する特定の心理的な場において起こる現象を解明しようとする……観察者の主観的世界と被観察者のそれという、それぞれ別個にオーガナイズされた2つの主観的世界の相互作用に焦点を当てる、間主観性の科学である(Atwood & Stolorow, 1984)」。

治療者との転移関係の中で出現した連想に対して、治療者が解釈をすることは、その二者の間で生じている関係性に対する解釈であることから、それは患者のみから一方的に生じた状況であるというよりも、むしろ治療者の存在やパーソナリティをも含み込んだ全体の文脈 context の中で生じたものと考えることができるという。

このような流れの中で、Stern,D.N.を中心とするボストンの分析研究チームである Boston Change Process Study Group (以下、BCPSG と表記)は、精神分析において治療の変化を推し進める要因は、言語的な解釈だけではなく、“解釈を超えた何か”があると主張し、一連の新しい関連概念(後述)を提唱し検討した(BCPSG, 2010/2011)。精神分析に限らず、広く心理療法においては、言語的なやりとりだけではなくて、言語を用いることによって暗示されるメタメッセージや、言語と同時に発せられる非言語的な情報(身振り手振りや表情、姿勢といった、患者がかもしだす雰囲気、ないし治療者の側にただよう雰囲気)によって作り出される、言語的な対話の記録には上りにくいような、心理療法における暗黙のプロセスに目を向けることが必要不可欠である。なぜなら患者の心理学的な変容とは、患者にとって暗黙のうちに成し遂げられていることが重要であり、患者が自らの変化を意識している段階では、それは患者が自らを「変化したもの」と思いこもうとしていること、言い換えれば「治療の継続に対する抵抗」であったり、「自分を変えようとしてくれる治療者へのアピール」であったりする場合が多いからである。

Stern (2004/2007) は、そのような暗黙のプロセスに関して、間主観的母体 intersubjective matrix という場において生じるという考えのもと、「モーメント」という概念を用いて説明しようとした。彼は面接における変化プロセスを詳細に分析しようと試み、クライアントの心の動きの瞬

間瞬間、面接でのやりとりの一単位を現在のモーメント *present moment* という用語で表現し、それが如何に活性化するかという観点から面接状況の分析を試みた。変化を促進する側面は、面接におけるそういった微細な関係性の進行や、言語以前のより原始的・非言語的なやりとりの中から生じると考えたのである。

一方、言語を中心的に用いない心理療法においても、言葉にできない暗黙の次元が治療にとって重要であるとされる考え方がある。弘中 (2014) は、無意識に抑圧されたものを「言語化」し「意識化」することを目指す精神分析と比較して、遊戯療法や箱庭療法などの非言語的アプローチにおける治療メカニズムについて「非言語的な心理療法ではイメージが主要な媒体となり、そのイメージ表現自身が心理的治癒をもたらす」ことがセラピストによって自明のものとして捉えられてきたことに疑問を呈し、その治療機序について議論しようとした。「遊びや箱庭制作は、クライアントに言葉では表現し尽くせない感情や身体感覚を伴う体験(前概念的体験)を引き起こす。この前概念的体験がクライアントの問題状況や治療プロセスと何らかのコンテクストで繋がるとき、その体験はクライアントにとって意味のあるものとしてまとまりを持ち、クライアントに決定的な内的変容をもたらすと考えることができる(弘中, 2014)」。ここで弘中は、Gendlin, E.T. の体験過程療法の中での「体験・前概念的」の考え方を引きつつ述べている。そして遊戯療法や箱庭療法におけるセラピストの役割は、決して受動的な見守り手ではなく、セラピスト自身の前概念的体験のレベルで、クライアントの前概念的メッセージを受信することであると考えている。モーメントの概念に先立って Stern (1985) によって述べられた生氣情動や情動調律の概念は、母子相互交流における非言語的な情緒の動きの伝えあいについてのものだったし、弘中も、前概念的レベルのコミュニケーションにおいて「セラピストは、直感的に(つまりは前概念的レベルで)捉えたクライアントの内的状態に情動調律(affect attunement)するべく、自身の行動(応答)を微妙に調整している」と述べている。このように、患者は治療者に「伝わった」とか「受け止めてもらえた」と前概念的レベルで感応し、暗黙のプロセスを進めていくのではないかと考えられる。つまり、臨床的な相互作用の生起をめぐるのは、治療者は患者と「いかに共にいるのか」というあり方が関連し、またその場が「いかなる雰囲気」を形成しているか」ということが重要であると考えられる。

では、そのように治療者がいかに患者と共にあり、患者はそこにどのように反応するのであろうか。特に精神分析的な相互作用において重要となる、そのような患者と治療者の関係性のプロセスに焦点を当てた概念について、以下に検討していく。

3. 相互作用の生起とエナクトメント

ここまで、心理療法において治療者とクライアントの間には相互作用が起こっており、それをいかに捉えるべきかという考え方の変遷について簡単にまとめてきた。一者心理学から二者心理学への流れの中で、治療者とクライアントが相互に影響を与え合い、時に感情的・非言語的な「やり方」でメタメッセージを伝えていること、それは暗黙のプロセスとして意識されていない前概念的レベルで行われていると考えられることを述べてきた。

近年の精神分析における重要概念として、上記のような暗黙に流れている関係性が行為として実演(表現)されることを指す概念として、エナクトメント *enactment* がある。Boesky (1982)

の定義によれば、エナクトメントとは、「意図を実現化することを含んだ体験や行動」で、この文脈でいう実現化とは、「本人が意識的に気づいていないであろう願望を満足させるように試みるという態度に含まれる願望の成就によって動機づけられる体験または行動」である。エナクトメントは、まさに心理療法における相互作用の産物として表現されてきたものであると考えることができる。エナクトメントをどのように扱うべきかについては諸説あるが、ここではその扱いではなく、いかなる性質のもので、実際的にどのように実演されるものであるのかについてもう少し詳しく検討したい。

川畑 (2014) は、「セラピストとクライアントの行為水準の相互交流を含み、治療の進展にとって重要な役割を果たした出来事」を治療的エナクトメントと呼びつつ、その根拠を、エナクトメントのもつ「同形性 isomorphism」と「新奇性 novelty」という二つの性質に求めた。同形性とは、「いずれのエピソードも、クライアントが、過去から現在にかけて、様々な他者と繰り返している困難な対人関係と、同形の構図を含んでいること」を指し、新奇性とは、「同形性には当てはまらない、新しい関係性の展開が含まれていること」を指す。「最終的に同形性から抜け出し、新奇な関係性に関われるのは、クライアント自身の達成」だとしつつ、同形的な治療的エナクトメントが生じた段階で、それは新しい展開への準備性を含んでいるというのである。意識化されていない暗黙のプロセスの中に、こうした同形的なエナクトメントが生じている場合は、治療者はそれを認識しそこに開かれた態度で共にいることが必要なのであろう。

先に述べた BCPSG がまとめた新しい諸概念は、このようなエナクトメントの振る舞いを説明することにも適していると考えられる。ここから BCPSG (2010/2011) に即して、その諸概念について紹介する。

進んでゆく moving along と現在のモーメント present moment BCPSG の理論は、これまでの精神分析的な臨床研究に加え、乳児発達研究の知見も応用しつつ組み上げられている。そこでは、日々の分析作業の全てを包摂するような概念として「進んでゆく moving along」という語が当てられている。「進んでゆく」プロセスは、精神分析でいう解釈や明確化などの治療的な要素を含みつつ、親-乳児関係のように全面的に非言語的な相互作用の過程において暗黙に達成されているような、情動の共有などの間主観的な理解をも含み込んだ言い方である。そして「進んでゆく」プロセスは、主観的に質も機能も異なるモーメントに分割されるという。さらにモーメントは、普段の分析作業を表す「現在のモーメント」や、変化を予期させるような「今のモーメント」、それから変化のきっかけとなるような「出会いのモーメント」と、様々な性質を持つものとして把握されている。

現在のモーメントは、「主観的ユニットとして、“今ここで二人の間に何が起きているのか”の感触をつかむのに必要なだけの時間」であり、「コンマ何秒ないし何秒という単位である。それは、意図ないしは願望、そしてその行為化 enactment をめぐって構築され、ゴールに向かって進むにつれ、劇的な緊張推移曲線を描く」という。現在のモーメントが繋がって、進んでゆくプロセスを構築するようである。現在のモーメントという概念は、心理療法において瞬間瞬間に何が起きている、それがどのように変遷していくのか、を捉えるための概念であろう。

今のモーメント now moment 現在のモーメントが、主観的・情動的に熱を帯び、いつもと変わらぬ分析作業の中に非日常的な空気を作り上げた時、それを「今のモーメント」と呼ぶ。治

療者と患者によって「共有された暗黙の関係」の現況が、当たり前ではなくなる」瞬間である。

「今のモーメントは、いつもどおり一緒に居ていつも通り進んでゆくという、典型的な現在のモーメントとは異なる。それは、注意の集中を求め、当たり前になっている習慣的枠組みに留まるかどうかをめくり、何がしかの選択を迫る。(中略)それは、治療者に、何らかの“行為”——それが解釈であれ、習慣的枠組みとの比較での目新しい反応であれ、あるいは沈黙であれ——を強いる。」クライアントがいつもと違う振る舞いをしてきた時、治療者なら誰しも、その行動なり語りについて考えるだろう。そしてそれをどう扱うかについて考えねばならない。その時、少なくとも治療者の側は、感情的に少なからず動かされるのではないだろうか。

出会いのモーメント moment of meeting 今のモーメントが的確にキャッチされ、治療者と患者の間主観的な関係や患者の関係知を変容する瞬間を、出会いのモーメントと呼ぶ。日常場面における出会いのモーメントの例を挙げると、二人の子供がひとしきり自由遊びをするなかで、二人の笑いの渦へと展開していくような瞬間や、親がなんども教えたり支援したりしているうちに、あの吠えるものを指して使う言葉が“いぬ”だと赤ちゃんが学習する瞬間、などである。治療場面でいえば、治療者またはクライアントが、今のモーメントにおける日常と離れた感じを認識した上で、「それを面接において取り上げ、それを二人で探索し体験する時、それは“出会いのモーメント”となる可能性が高い」という。それは例えば、面接開始からずっと自分の話をし続けていたクライアントが、突然気まずそうに沈黙しはじめ(今のモーメント)、治療者がそれに気づきつつ様子を見ていたとすると、クライアントが口を開き「なんだか私はいつも壁打ちのようにしゃべっていて、先生とキャッチボールが出来ていませんね」と発言した、などの場面がわかりやすい。治療者が今のモーメントから出会いのモーメントを創り上げるためには、いくつか欠かせない要素があるという。それは、「治療者は、パーソナルな署名入りの、何か明確に個人的な側面を使わずには済まされない。二人は、少なくともその瞬間、通常の治療上の役割からすればとても隠れ身とは言えない、人間同士として出会っている」と言われたり、「“出会いのモーメント”を構成する行為は、型通りの、習慣的、技法的なものではありえない。そのモーメントの非凡性に見合う、新奇なものでなくてはならない」という。そしてそのためには、「それなりの共感や、情動的・認知的再評価に対して開かれていること、そして、シグナルに呼応しての情動調律などが前提となる」という。このようにして出会いのモーメントが生じ、またこのタイミングでの解釈こそ、クライアントの体験や無意識の再編成が行われ、変容にいたるという理論である。

関係性をめぐる暗黙の知 implicit relational knowing ここで重要なもう一つ概念として、“関係性をめぐる暗黙の知 implicit relational knowing”(以下、関係知と表記)がある。関係知は、クライアントが過去に体験してきたような、人との関係について暗黙に理解し、知らず知らずのうちに陥ってしまうような、つまりは同型的な関係についての手続きの知識のことである。「“出会いのモーメント”は、進んでゆくプロセスで新生してくる特性であり、それが間主観的な環境を改変し、いずれは関係性をめぐる暗黙の知の変容へとつながる」ともいわれ、出会いのモーメントは、治療的エナクトメントの新奇性が生じる瞬間とも似た、その人の関係知を変容する方向に機能する。

BCPSG による概念についてやや詳細に説明してきたが、心理療法における相互作用を考える

上で非常に利用可能性の高い概念ではないかと筆者は考えている。今のモーメントは、エナクトメントそのもののようであり、出会いのモーメントは、エナクトメントの新奇性を表現しているようである。これらの概念は相互作用や間主観性といった観点から心理療法を考えていこうとする時に役に立つと考えられる。

解離モデル さらに別の角度からエナクトメントを捉えなおした理論として、Stern (2010/2014) や Bromberg (2011/2014) による解離モデルの考え方がある。Stern は、ある個人が関係性のなかで生じる潜在的な意味が受け入れられず、また葛藤もされない場合に、未構成のままにされる事態を「解離」と呼んだ。「私が解離という言葉で指し示すのは、無意識的な防衛的理由のために、患者あるいは分析家、またはその両方が、自分が関与している相互交流のなかにあるバーバルな意味、ノンバーバルな意味、あるいは準象徴的な意味を活用し損なう過程である。(Stern, 2010/2014)」そして Stern は、エナクトメントを「解離の対人関係化」といい、「自分がそのようであってはならない人物であることを回避するために、自分に認め難いアイデンティティを相手に無理やり押しつけようと努めることで成し遂げられる、ぎりぎりの無意識的防衛の努力」だと言っている。また「自分でないものは象徴化できないのだから、多くの場合、それは情緒的な負荷の高いエナクトメントの形でしかセラピーの中に姿を現すことができない」とも述べている。この立場では、エナクトメントは解消されるべきなのは、「それによって自己の境界が拡張されるためばかりではなく、患者と分析家が互いに相手の経験に立ち会うことのできる範囲が再設定されて拡大されるためでもある」のである。

これらの諸概念を踏まえて考えてみると、エナクトメントのポジティブな側面とネガティブな側面が見えてくる。すなわち楽観的に考えれば、エナクトメントは関係性を新奇なものにしていくと期待できる出来事であり、それはクライエント個人の関係知の変容を意味し、関係の新奇性が自己の拡張と関連している。しかしそれは一方で、そのエナクトメントが生じる時は、クライエントが認めたくない、解離された体験様式を表現しているとも言えるため、「今のモーメント」が「出会いのモーメント」となる文脈で説明したような、新奇な関係の場が醸成され、面接の雰囲気は現在のモーメントとは異なるフェーズに移行したような感覚を抱いた際に、その関係のあり方について安易に解釈を行うことは避けるべきではないかとの疑問も浮かんでくるだろう。このように考えると、治療者が面接においてクライエントとの間で生じるエナクトメントを捉えた時、それがクライエントのこれまでの人生の体験においてどのように位置付けられる形式を備えているのか、それが生じたことによって面接におけるクライエントと治療者の関係はどのように変質しているのか、について十分に考える必要がある。

ここで注目すべきことは、エナクトメントを中心として、その周辺概念と考えられるモーメントや関係知のどれを取っても、それらは「情緒的な負荷」ないし「情動の共有」といった、感情的な性質を持つものであること、また非言語的な振る舞いや態度、前概念レベルの感応といった、身体性を伴う動きの中で生じる出来事であることではないか。エナクトメントが治療的に意味のあるものとして出現し、新奇なものへと変容していくためには、そのような身体性を伴った、情動的に熱を帯びたものである必要があるのである。エナクトメントは、治療的な意味を持たなくても常に生じうるものであり、またそれは治療者に見過ごされることもあるため、治療者はこのような情動的な「雰囲気」を感知する目を養い、治療者自身とクライエント

の身体性に開かれた態度で面接を行うことが肝要なのではないかと考えられる。

では身体性に開かれた態度とは如何なるもので、また身体性や情緒性を帯びた雰囲気とはどのように生じるのであろうか。筆者が行った研究を手掛かりに次節で述べる。

4. 身体性を伴う〈動き〉とそのアセスメント

筆者は、面接中に前概念的レベルで感応しあっていると考えられるような、モーメントの雰囲気を作る元となる個人の振る舞いの有り様に着目し、研究を行った（佐藤, 2011）。ここでの振る舞いの有り様とは、心的な次元（感情、情動の動き）と身体的な次元（身振り手振りや姿勢の変化等）であり、〈動き〉が実体として表現されたものと考えた。ここでの〈動き〉とは、心身両面にわたる個人の体験の律動であり、その時間的空間的な「揺れ」である。当該研究ではそれら振る舞いの有り様がパーソナリティ特性の違いとどのように関係するのかを、Jung & Riklin (1904/1993) の言語連想検査を用いた調査によって検討した。より具体的に言えば、言語連想検査場面の過程における情動の動き方と、姿勢や身振りなどの動きと、Jung の心理学的類型論における外向-内向性や4つの心的機能（思考、感情、感覚、直感）のあり方との関連を検討した。その結果、内向的なパーソナリティの人は、検査場面における瞬間的な身振りや姿勢の変化が少なく、持続的な身体の揺れや特殊な動作が目立ったが、情動の動きは安定的であった。一方で、外向的なパーソナリティの人は、髪を触ったり姿勢を動かすなどの瞬間的な身振りや姿勢の変化が多く、身体の持続的な揺れは見られず、情動の動きは激しい人が多かった。これらのことから筆者は、心的エネルギーの動く方向性の観点から、身振りや姿勢の変化といった身体的な次元へと方向付けられるエネルギーと、感情や情動の動きといった心的な次元へと方向付けられるエネルギーには、その内向性と外向性によって大まかに違いが見られることを考察した。瞬間的な身振り手振りは、情動の動きの激しさや防衛的な態度に伴って表現されているのに対し、身体の持続的な揺れなどは、情動の動きに伴って、つまり心的次元での動きに伴ってのものではなくて、もっと身体的で、原初的な動きであるように思われたのである。本稿の流れに沿って考えると、前概念的レベルのやりとりの母体となっている〈動き〉は心的・身体的な次元で体験され表現されるものであり、それはクライアントの内向性や外向性などのパーソナリティの違いによって、大きく異なるものになる。身振りや手振りが同期することが共感体験を促進するという研究もあるが、同期する動作の質が異なれば、そこで交わされている交流も質も異なると考えるのが自然ではないかと考えられる。

また、ここでの心的次元と身体的次元へのエネルギーの方向性の差異は、解離モデルにおけるエナクトメントの捉え方に応用できる部分がある。すなわち、心的次元と身体的次元のそれぞれの動きが連動していない人、言い換えれば、情動の動きはあまりないが身体動作は激しかったり、逆に情動的に激しく揺れているにもかかわらず身体的には微動だにしない、といった、ダブルバインド的なメッセージを発しやすい人というのは、解離の対人関係化としてのエナクトメントを、非言語的に表現しやすいのではないか。つまり心的な次元では感情の動きを意識しておらず「自分は落ち着いている」と感じているクライアントが、身体の動きや行動レベルでは激しく動いており、それはエナクトされるといった状況を生じやすいのではないか、ということである。これについては推測の域を出ないが、心的次元にエネルギーを注ぐ人の非

言語的な振る舞いは、自分でも気づかないような、解離された動作になっていると考えられる。

心理療法において相互作用の治療的意味を考える際に、クライアントのアセスメントが欠かせないことはいまでもないが、ただ相互作用として捉え、生じるかどうかかわからないエナクトメントに気を配るだけではなく、クライアントがいかに情動的・身体的な〈動き〉を体験していて、またそれが如何に外界に表出されているのか、といったクライアント個人の〈動き〉の有り様をアセスメントし、そこに感応していこうとするセラピストの柔軟な態度が求められているといえよう。そうすることで、モーメントは変化し、治療的エナクトメントが生じるきっかけを作りやすくなると考えられる。言い換えれば、セラピストはクライアントの生気情動や、言語化しえない前概念的レベルの体験様式が如何なるものなのかに思いをはせつつ、言語面接においても、遊戯療法や箱庭療法の際の「共にいるもの」として、クライアントの瞬間的な〈動き〉を感じ取ろうとする能動的態度を維持して面接に臨むべきであると考えられる。そのような態度を継続しながら、言語的応答を行うことによって、解釈は真に意味あるものとなるし、前概念的レベルで動いているクライアントの過去の重要な関係知の再演、つまりは転移関係も促進されることになるのではないかと考えられるのである。しかしながら、エナクトメントはクライアントが自らに受け入れがたい自己の部分との葛藤が成り立たず、解離している部分がセラピストとの間で再演されているとも考えられるため、それをどう扱うのかには、注意も必要であろう。

それでは、そのような態度を維持することによってもなお、「生じるかもしれないし、生じないかもしれない」という特性を持つ治療的なエナクトメントの偶然性についても、次節で紹介しさらに議論を進めたい。これにより、心理療法における相互作用が如何なる単位で生じ、どのように表現され、またセラピストはそれをどうアセスメントし、受け止めていくべきかがより明確になると考えられる。

5. エナクトメントの偶然性と複雑系・共時性

既に述べたように、エナクトメントは、生じるかどうかかわからない「偶然性」を秘めている。川畑（2014）も、治療的エナクトメントは「生じるかもしれないし、生じないかもしれないもの」と述べている。ただ生じることを待つだけではなくて、このような偶然性がどういった性質のものかを吟味しておくことが必要である。

ユング派分析家の Cambray, J. と Carter, L. は、エナクトメントを、複雑系の理論や創発 emergency の原理との関連で説明した（Cambray & Carter, 2011）。複雑性科学とは、自然現象や社会現象など多数の要因が複雑に絡み合った現象についての科学である。複雑性 Complexity とは、ある集合に関して、完全に秩序だっているわけでもなく、また完全に混沌 chaos でもないような、一定の法則性を持ちつつ自由な振る舞いをする集合のもつ性質のことであり、要素に還元できない独特の特質を持つとされている。クライアントとセラピストの各々の経験やパーソナリティ、また面接の状況など多数の変数を含みつつ、一定の理論や態度で臨みつつ自由さも持っている心理療法もまた、複雑性の1つであると考えられる。そのような複雑性をもつ場において新奇な特質が生じることを創発 emergency と呼ぶ。Cambray & Carter (2011) は、ユング的な意味での創発性は、意識と無意識の相互作用の複雑系のなかから生じると考えた。

「無意識的なものを意識的なものにするということは、還元できるのではなくて、無意識の過程に合う意味を探ることが、進行中の相互影響（意識的なものと無意識的なものの相互影響）を可能にするのである。ユングは、そのような出会いにおける変容の潜在力は、『生きた、第三のもの…新しい次元の存在を導く生きた誕生、新しい状況』（Jung, 1916）の創造を通した相互作用の創発によってのみ可能だと認識していた。より低い（完全でない）次元において作動している構成要素の相互作用に起因しないような、この新しい次元の存在は、まさに心（意識＋無意識）の創発性である。」さらに Cambray らは、そのような意識と無意識の相互作用だけでなく、複雑系が成立している場、つまりセラピストとクライアントによる共同の場である面接もまた、創発を生じる潜在力のある場であると考えている。「相互作用の場で作動しているような、セラピストのもの思い（Ogden, 1997/2006 を参照）や、エナクトメントの役割（Ellman and Moskowitz, 1998）（中略）は、創発現象を引き起こす方法を増大させるためのより役に立つ道の 1 つである」（Cambray & Carter, 2011）。このような発想は、出会いのモーメントと共時性を結びつけて考えられること（Hogenson, 2009）とも関係しており、エナクトメント、出会いのモーメントのような瞬間が偶然に、そして意味のある共時的な性質をもって創発される環境を整えるためにも、日々の分析作業は、ある意味でいつもどおりの、単調な進んでいくプロセスを歩まねばならないとも考えられるだろう。暗黙の関係性ないし解離された自己がエナクトメントとして実現され解消されるために、そしてそこに出会いのモーメントが生じるためには、それが偶然に生じるための複雑系の場を維持し、一定の法則性をもって、かつ自由な雰囲気を持ちながら、セラピストは面接を根気よく続けていかねばならないのであろう。

6. おわりに

本稿では、心理療法における相互作用が如何なる概念で説明され、どのように言語化されてきたのかを振り返りながら、そこで起こっていることを検証し、治療的に意味のある相互作用が生じること、またそれを活用することについて考えてきた。相互作用は、言語化され明示的になされるレベルに加えて、非言語的で、意識されず暗黙に進むレベルが存在している。またそのような暗黙のプロセスに目を向けることこそが、解釈等の治療的介入をより確かな、意味のあるものとする。暗黙のプロセスでの相互作用は、「確かに何かを体験しているが、言葉にはなりにくい」ような、前概念的レベルのコミュニケーションである。これは、遊戯療法や箱庭療法などの非言語療法の治療機序として考えられているものだが、言語が中心的な位置を占める心理療法においてもこのレベルのコミュニケーションは行われていると考えられ、セラピストはそこへ開かれた態度を維持しつつ面接を行うべきである。特に非言語的な次元でやりとりされるような、関係知、エナクトメント、モーメントといった諸概念を踏まえつつ、言語的な応答を日々行いながら、その背後に流れる暗黙の関係の進んでいくプロセスに目を向けねばならない。そして、そこから創発される新奇な関係性、出会いのモーメントを逃さぬよう努めねばならない。創発は個人内の意識と無意識、またクライアントとセラピスト等の二項対立構造における、弁証法的な関係の中で、それらの間で新奇なものが生じてくることであり、それは共時的な現象とも結びつくものである。

本稿は、心理臨床における相互作用という広大なテーマを設定し、学派を超えて心理療法に

における治療者とクライアントの治療的なやりとりについて考察しようと試みた。今回とりあげた理論や事象は一部に過ぎないため、今後も詳細な検討が必要であろう。特に言語化が困難な領域を扱っているため、その理論的背景を説明するより慎重な議論が必要になってくると思われる。加えて本稿では、抽象的な議論にとどまり、事例を用いた検討ができなかった。心理臨床における相互作用の様子は、事例研究を通して真に豊かに展開されると考えられるため、今後の課題としたい。さらに、本稿で扱ったような暗黙のプロセスや、前概念的レベルのコミュニケーションという考え方は、音楽療法やダンス／ムーブメントセラピーなどの非言語的なプロセスを重視する芸術表現療法にも関連の深い事柄であると考えられる。そこから必然的に、相互作用において治療者と患者の「身体」がいかに振舞っているのか、内的・外的な身体のあるようについても考える余地がある。そのような議論から、クライアントの症状と二者関係の展開のありようや、病理との関連など、本稿のテーマは多様に広がりを持つ問題である。心理療法が如何なる作業を行っているのかについて、説明責任が重要になってきている昨今にあって、本稿で扱ったような、心理療法における独特の非言語性や関係性を考慮した議論は、今後ますます求められているのではないかと考えられる。

引用文献

- Atwood, G.E. & Stolorow, R.D. (1984) *Structures of Subjectivity: Explorations in Psychoanalytic Phenomenology and Contextualism, Second Edition* (2014). Hillsdale, NJ, The Analytic Press.
- Boesky, D. (1982) Acting Out: A Reconsideration of the Concept. *Journal of International Psycho-Analysis*, **63**, pp.39-55.
- Bromberg, P.M. (2010) *The Shadow of the Tsunami: and the Growth of the Relational Mind*, Routledge.
- (吾妻壮・岸本寛史・山愛美訳 (2014) 関係するところ 外傷、癒し、成長の交わるところ、誠信書房)
- Cambray, J. & Carter, L. (2011) *Analytical Psychology: Contemporary Perspectives in Jungian Analysis*, Routledge.
- Ellman, S. & Moskowitz, M. (1998) *Enactment: Toward a New Approach to the Therapeutic Relationship*, Northvale, NJ: Jason Aronson.
- 弘中正美 (2014) 遊戯療法と箱庭療法をめぐる、誠信書房。
- Hogenson, G.B. (2009) Synchronicity and moments of meeting, *Journal of Analytical Psychology*, **54**, 183-197.
- Jung, C. G. & Riklin, F. (1904) Experimentelle Untersuchungen über Assoziationen Gesunder. *Journal für Psychologie und Neurologie* III, pp.55-83, 145-164, 193-215, 283-308, und IV, pp.24-67.
- (C・G・ユング「第一部 正常者の連想についての実験的研究」『診断学的連想研究』高尾浩幸訳、みすず書房、pp.9-206、1993)
- Jung, C. G. (1916) The Trancendent Function. / *Collected Works of C.G.Jung Volume 8, The Structure and Dynamics of the Psyche*, Princeton University Press.

- 川畑直人 (2014) 精神分析的な心理療法におけるエナクトメントの意義. *京都精神分析心理療法研究所紀要*, 1, 5-14.
- Ogden, T. (1994) *Subjects of analysis*. Northvale, NJ: Jason Aronson. (和田秀樹訳 (1996) 「あいだ」の空間-精神分析の第三主体 新評論)
- Ogden, T. (1997) *Reverie and Interpretation: Sensing something human*. Northvale, NJ: Jason Aronson. (泰士訳 (2006) もの想いと解釈—人間的な何かを感じる— 岩崎学術出版社)
- 佐藤映 (2011) 京都大学大学院教育学研究科修士論文 (未公開).
- Stern, D.B. (2010) *Partners in Thought: Working with Unformulated Experience, Dissociation, and Enactment*, Routledge. (一丸藤太郎監訳 (2014) 精神分析における解離とエナクトメント 対人関係精神分析の核心、創元社)
- Stern, D.N. (1985) *The Interpersonal World of the Infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology*. New York: Basic Books. (小此木啓吾・丸田俊彦監訳 (1989) 乳児の対人世界 理論編・臨床編、岩崎学術出版社)
- Stern, D.N. (2004) *The present moment in psychotherapy and everyday life*. New York: Norton. (奥寺崇監訳 (2007) プレゼントモーメント 精神療法と日常生活における現在の瞬間、岩崎学術出版社)
- The Boston Change Process Study Group (2010) *Change in Psychotherapy: A Unifying Paradigm*. W.W.Norton and Company. (丸田俊彦訳 (2011) 解釈を越えて サイコセラピーにおける治療的变化プロセス、岩崎学術出版社)
- Winnicott, D.W. (1971) *Playing and Reality*. London: Tavistock. (橋本雅雄訳 (1979) 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社)

(博士後期課程3回生)

(受稿 2015 年 9 月 1 日、改稿 2015 年 11 月 4 日、受理 2015 年 12 月 24 日)

臨床的な相互作用の生起と活用をめぐる

—非言語的交流とエナクトメントを中心として—

佐藤 映

心理療法は、セラピストとクライアントの相互作用の場である。二者にとって意味のある相互作用とはいかに生起し、セラピストはそれをいかに受け止め、活用していけるのであろうか。今日では、その二者には気付かれにくい、暗黙に存在する意図が実現される“エナクトメント”が議論の中心となってきた。エナクトメントは、クライアントにとって受け入れがたい人格が解離されたものという見方もでき、それは面接における情緒的な雰囲気や、身体的な感応性を伴って初めて意味のあるものとなる。言語を中心とした面接であっても、面接者がそのような次元に開かれた態度が重要でいることで、“進んでいく”モーメントが活性化し、クライアントの関係知の変容につながる。加えて、相互作用に関わる心身の〈動き〉はパーソナリティによって質が異なるため、個々のクライアントの〈動き〉を見立て、エナクトメントや創発、共時的現象に開かれた姿勢が大切である。

The Emergent and Praxis in Clinical Sessions: Nonverbal Interaction and Enactment

SATOH Utsuru

Psychotherapy is the field of interaction between the therapist and the client. How can meaningful interactions between them emerge, and how can the therapist hold and make use of them? Today, there is the great deal of discussion worldwide regarding “enactment,” which is the actualization of implicit intention, and that is difficult for two persons to notice consciously. We can see enactment as the dissociated parts of personality, and it is not until enactment emerges with emotional atmosphere or physical sensitivity that enactment can be meaningful. Even if the therapist should look onto verbal-centered sessions with an attitude of pre-conceptuality, the therapist has kept an attitude of such dimension so that the “moving along” moment is being activated, and the client’s implicit relational knowing would change. In addition, the psycho-somatic “movement” related to the interaction has various qualities for each individual personality, and so the therapist should assess the “movement” and run sessions with an attitude of enactment, emergent and synchronicity opened.

キーワード： 臨床的な相互作用、エナクトメント、創発

Keywords: clinical interaction, enactment, emergence